

# 可能の意味を含む有対自動詞の産出的能力の習得 —中国語を母語とする学習者を対象にした調査に基づいて—

封 小芹

## 1. はじめに

日本語教育では初級の段階で日本語を学ぶ学習者に可能表現<sup>1</sup>を教える際に、次のような規則による表現形式を教えるのが一般的である。

規則1 動詞の基本形+ことができる 『新編日語1』<sup>2</sup>による

規則2 五段動詞(u 動詞)語幹+eru

一段動詞(ru 動詞)語幹+rareru

不規則動詞「来る」→「来られる」; 「する」→「できる」

『新編日語2』による

従来の日本語文法においては、可能表現の表現形式は大体次のように分類されている。

1 動詞未然形+可能の接尾語「れる」「られる」

2 サ変動詞の語幹+「できる」

3 動詞連体形+「ことができる」

4 可能動詞「読める」、「走れる」

5 動詞連用形+「うる」「える」

以上のように、日本語教育にしる、日本語文法にしる、可能表現を述べる際に、「可能の意味を含む自動詞」に関しては、触れていない。

<sup>1</sup> 張(1998:29)によると、可能表現はある事柄の実現ができるかできないかを問題にする表現である。本研究もそれに従う。

<sup>2</sup> 「日本語教育国別情報」国別一覧《中国》によると、日本語専攻で広く使われている教材としては、『新編日語』全4冊(上海外国語大学)などがあるという。

封 小芹

一方、日本語の中では、自動詞、他動詞の使い分けがある。<sup>3</sup> 自動詞と他動詞は対になっているものと対になっていないものがある。自動詞他動詞の対応とは、ここでは、早津1987(80)の定義に従う。つまり、自動詞と他動詞の間に形態的、意義的、統語的な対応が成り立つ場合にのみ、その自動詞と他動詞が有対自他動詞になる。すなわち両者の間に自他の対応が成り立つと見なすことにする。「統語的対応」とは次のような関係、すなわち自動詞文の主語が、(形態的、意義的に対応する他動詞による)他動詞文の目的語であるという関係をいう。

- 例 1 a. ドアがあく。  
b. 花子がドアをあける。  
例 2 a. 荷物が届く。  
b. 郵便配達人が荷物を届ける。

例1の a は文脈によって、例3のような自動詞文になると、意味的には例4のような他動詞表現と同じになる。今までの先行研究によると、このような自動詞表現は可能の意味を含むとされている(森田1988、ヤコブセン1989)。

- 例 3 ドアをあけようとしたが、なかなかあかなかった。  
例 4 ドアをあけようとしたが、なかなかあけられなかった。

しかし、張(1998)によると、このような自動詞で表わしている可能表現は形式上可能な標識<sup>4</sup>を用いてないことから、無標識の可能表現と呼ぶことができると指摘されている。一方、中国語では、可能表現は基本的に二つの形式があるとされている。一つは「能 neng」「会 hui」「可以 keyi」のような助動詞を用いる形式であり、いま一つは動詞と補語成分との間に「得 de」または「不 bu」を挿入する形式(例えば、买到→买得到・买不到、买来→买得来・买不来)(張1998:24)である。このような自動詞の可能表現に関しては日本語初心者のみに限られるものではなく、相当な日本語学習歴のある上級の学習者においてもしばしば誤用が見られると張(1998)は指摘している。

筆者が中国で日本語を教えた経験からいっても、学習者は「门打不开」(ドアがあかない)というような文を「\*ドアがあけない」(ここでの「あける」を学習者が「あく」の可能形とし

<sup>3</sup> 山田(1908)のような否定論があるものの、何らかの定義に基づいて動詞の下位分類としての自動詞と他動詞を認めることが広く行われている。

<sup>4</sup> ここでいう可能の標識とは可能表現の表現形式「レル」「ラレル」「コトガデキル」を用いた三つの標識のことである。

て理解していると思われる)と言ってしまふ。そこで、本研究では、中国語を母語とする日本語学習者を対象に可能の意味を含む有対自動詞の産出的能力の習得状況を見ていくことにする。

## 2. 先行研究及び本研究の立場

### 2.1 日本語の可能表現に関する従来研究

まず、日本語の可能表現について、これまで多くの研究者によって様々な立場から研究が行われてきた。青木(1980)、寺村(1982)などにおいては、可能表現は動詞の相の一つである「可能態」として扱われてきた。

可能表現の表現形式については現代日本語においては主として次のような形式と見なされている。

- A. 動詞の未然形＋可能の助動詞れる・られる
- B. 五段活用動詞の語尾-u→-e-ru の形をとるもの(いわゆる可能動詞)
- C. サ変動詞の語幹＋できる
- D. 動詞の連体形＋ことができる
- E. 動詞の連用形＋うる・える

これらの表現形式は現代日本語の可能表現の標識として一般に認められている。

いわゆる可能表現というのは、一言で言えば、ある事柄の実現ができるか否かを問題にする表現である。日本語の可能表現の研究で、特に注目されるのは、金子の「認識可能」である。金子(1980)は「現代日本語の標準語における可能表現の内部には、文法的な意味の観点から見て、まず基本的に区別されなければならない二つの意味領域がある」とし、日本語の可能表現を「能力の可能」と「認識の可能」と二類に分けた。認識の可能の例として金子(1986)は次のようなものを挙げている。

例 5 同じような事件が今後も起こり得る。

例 6 靖国公式参拝に踏み切るのは、被侵略国人民の感情を傷つけるもので、中国も無関心ではあり得ない。

例5、6からもわかるように、いわゆる認識可能の表わす意味は、つまりある事柄(える・

封 小芹

うるの前要素が受けている内容)が実現する、あるいは存在する「認識上の可能」である。このような可能性は、あくまでも話し手の客観的情况に対する主観の判断によって決められると行うことができよう。

## 2.2 動詞の下位分類に関する先行研究

まず、日本語における可能の意味を含む有対自動詞に関し、都築(2001)では、自動詞を「可能の意味を含むか」という点に注目すると、以下の3群に分類できると指摘している。

表1 自動詞の下位分類

	自動詞の下位分類	特徴	例
1	可能形にできる自動詞	意志性がある	会う、遊ぶ、集まる
2	可能の意味を含む自動詞	潜在的な意志性がある	合う、上がる、当たる
3	可能形にできず、可能の意味も含まない自動詞	意志性がない	遭う、飽きる、明ける

そして、当然ながら「可能の意味を含む自動詞」は2グループに属すると指摘している。さらに、表1の3つのグループは、都築は次のように区分することもできると指摘している。

自動詞の下位分類:

1. 意志動詞
2. 無意志動詞の有対自動詞
3. 無意志動詞の無対自動詞

この場合、無意志動詞の有対自動詞が「可能の意味を含む自動詞」に相当すると指摘している。

しかし、都築(2001)の分類によると、自他同形の「もつ」や「ひらく」の自動詞としての場合の分類はどれにも当てはまらない。従って、都築の自動詞のその分類は不十分なものだといえる。

次に、長友(1997)では、可能形の規則による動詞の分類が行われた。長友の分類は3つの基準、つまり

1. 可能の接辞「レル」「ラレル」と共起できるか否か
2. 対のある動詞か否か

3. 五段動詞であるか一段動詞であるか

という3つの基準を取り入れた。しかし、日本語の可能について扱うのなら、語彙的な意味そのものは勿論、具体的に文法的に使用された姿で、主語が「有情物」か「無情物」かという要素を考えなければならない。このことに関しては、張(1998:30)でも動作の実現を有情物の希望と結びつける考え方が可能表現の本質であると指摘している。ところが、日本語学習者において、主語が「有情物」か「無情物」であるかに関して、従来の日本語教育では往々にして指導がされてきていない。

また、青木(1997)は、「可能」の形態から見た自動詞の分類を試みている。青木は自動詞を可能の接辞「(ら)れる」、及び「ことができる」と共起するか否かで形態上分類すると、次の表1のように四つに区分することができるとしている。

表2 自動詞の分類

	動詞の例	(ラ)レル	コトガデキル
タイプ1	上がる 集まる	○	○
タイプ2	受かる 増える	×	○
タイプ3	決まる 閉まる	×	×
タイプ4	割れる 見える 聞こえる	×	×

この中でタイプ4にあげた自動詞「割れる」は、他動詞「割る」の可能形「割れる」と同形であることから、タイプ3に分類した自動詞とは区別してある。(青木、1997:12)

2.3 中国語における可能の表現

張(1998:88)では、「有対自動詞は日本語の『結果可能表現』<sup>5</sup>の主な表現形式であり、中国語では可能表現で表すものが、日本語では自動詞で表す。」また「それらの可能表現は必ず何らかの形で動作主の意図が関わっている。」としている。そして、有対自動詞の可能表現は可能の意味を表していることは確かであるが、可能の標識を用いていないという特徴から、このタイプの可能表現は無標識の可能表現と呼ぶことができ

<sup>5</sup> 張(1998:99)は、「結果可能表現」を「動作主がある動作変化を実現しようとして動作を行う場合、動作がなされた後、主体的または客体的条件によって、動作主に意図された目的、即ちある出来事またはある種の状態変化が動作主の思い通りに実現することができるかできないかを表す可能表現である。」と定義している。本論もこの定義に従う。

封 小芹

る(張1998:75)。一方、先に述べたように、中国語の可能表現は基本的に二つの形式があるとされている。一つは「能 neng」「会 hui」「可以 keyi」のような助動詞を用いる形式であり、いま一つは動詞と補語成分との間に「得 de」または「不 bu」を挿入する形式(例えば、买到→买得到・买不到、买来→买得来・买不来)である(張1998:24)。つまり、中国語の可能表現はいずれも標識のある表現である。一方、張の指摘にあるように、日本語では自動詞で表わされることがある。日本語学習者には誤用が起りやすいと考えられる。

#### 2.4 KYコーパスにおける自他動詞の使用状況

本稿では、OPIの文字化資料であるKYコーパス<sup>6</sup>を用い、中国語母語話者における対のある自他動詞の使用状況についても考察する。日本語のレベルは初級、中級、上級及び超級の4段階に分かれている。

表2 対のある自他動詞の使用状況と誤用例数

	初級 5名	中級 10名	上級 10名	超級 5名
誤用数/総使用例数	0/18	10/251	14/322	1/126

注)中石(2005:25)より、一部改変。

中国語母語話者の発話に現れる動詞の抽出はコーパスを読みながら、マーカーでチェックを入れていく方法で、全て手作業で行った。その理由としては、抽出の際に以下の3点を考慮したことによる。なお、誤用に関しては、日本語母語話者複数名にも誤用であるかどうかを判断してもらい、判定の基準にした。

1. 文字起こしで記述された動詞が、学習者の意図した動詞であるかどうかよく観察する必要がある
2. NSの先行発話を受けた単なるくりかえし発話を分析資料から除く必要がある
3. 自ら発話の訂正を行った場合、最後の発話のみを見ることにする

以上の3点から、本研究では、資料に出現する動詞を質的に分析する必要があると考えられるので、分析ソフトの使用はあえてしなかった。

<sup>6</sup> KYコーパスには中国語、韓国語、英語母語話者各30名ずつのOPI(Oral Proficiency Interview)での発話が文字化して収められている。その30名の内訳は、各母語話者とも初級5名、中級10名、上級10名、超級5名である(鎌田1999, 山内1999など)。

「切れる」「切る」の使用状況は以下のようである。

肉は切れたり、ほ、細く、細くに切れたり 「CIM05」<sup>7</sup>

「あく」「あける」

(泥棒が部屋を侵入)はことか、<え->みんな開いている、<え-え->開けてる、<ん->なんです。 「CIH03」

「届く」「届ける」

(教育について)爆発した文句は、もうちょっと上の方には意見は届けないんですね。 「CAH06」

「伝える」「伝わる」

(中国のいいところ)親孝行とか、この原因は、まだ今までの伝統はずいぶん伝えて、いると思います。

「変わる」「変える」

(街の変化)自分の努力次第で、生活も変えるし

「続く」「続ける」

(社会問題)今の状態は続けていけば、水準は落ちていくと思う。 「CAH01」

以上、例に挙げたように、KY コーパスにおける有対自動詞の使い分け、とりわけ、可能の意味を含む有対自動詞の使用状況は上級者(CAH01、CAH06)においても誤用が見られる。

### 3. 研究課題

以上、先行研究を見てきたが、本研究ではそれらの先行研究を踏まえた上で、学習支援のために、まず可能の意味を含む有対自動詞の分類を試みる。先行研究からわか

<sup>7</sup> KYコーパスに示された学習者を識別する「3つのローマ字+2桁の数字」という番号であり、これによって被験者の母語を OPI における口頭運用能力の評定結果が分かるようになっている。一つ目のローマ字は母語話者を表す記号であり、英語(E)、中国語(C)、韓国語(K)である。二つ目のローマ字は評定結果で、初級(N)、中級(I)、上級(A)、超級(S)。三つ目のローマ字はサブレベルを表し、下(L)、中(M)、上(H)である。なお、上級にはサブレベル中(M)がなく、「上級」、「上級-上」で判定されており、超級にはサブレベルがない。最後の 2 桁の数字は同じ母語で同じレベルの学習者内での通し番号を表す(山内 1999)。例えば CIM05 は、この学習者が中国語母語話者(C)で中級(I)-中級(M)レベルと判定された個人識別番号 05 番の学習者を指す。本稿では、KY コーパスの記号をそのまま用い、学習者の母語、レベル、個人識別を表す記号とした。

るように、可能形を作る際、他動詞の場合は五段動詞は未然形+「reru」、一段動詞は連用形+「rareru」(食べる→食べられる)というようにそれほど問題にならないが、(学習者によっては語尾の変化に慣れるまで苦勞することもあるが、ここではそのような問題は対象として取り上げない)そのため本研究では、学習者が可能形「れる・られる」を作る際に誤用が起こるといふところに視点を置いて、次のように分類を試みた。

第一に、動詞をそれに対応する自動詞もしくは他動詞があるか否かで、有対自他動詞、無対自動詞、無対他動詞の三つに分けられる。さらに、これまでの先行研究でも比較的多く用いられてきた「語末の形」、つまり形態的な視点と「主体が有情物<sup>8</sup>か無情物か」という区別も取り入れ、各カテゴリを再分類している。

1. 有対自・他動詞:<sup>9</sup>

A 類<sup>10</sup> 自動詞の語末が/-u/で、他動詞の語末が/-eru/

例: あくーあける とどくーとどける つくーつける

B 類<sup>11</sup> 自動詞は、文脈によって、主語が有情物と無情物と両方使われうる(自動

詞の語末が/-aru/で他動詞の語末が/-eru/)。この種の対応が自他の対応で最も語数が多いものである(寺村 1982:309)

例: あがるーあげる あつまるーあつめる

C 類<sup>12</sup> 可能の意味を含む例: 見えるー見る 折れるー折る

D 類<sup>13</sup> 自他同形例: ひらく viーひらく vt もつ viーもつ vt

E 類<sup>14</sup> 上記以外例: のびるー伸ばす おちるーおとす

<sup>8</sup> 藤井(1971)の「有情物の希望がかなえられて、あるいは努力が実って、動作が実現すること」で見られるような「動作の実現」を「有情物の希望」と結び付ける考え方は可能表現の本質を突いた見解である(張 1998:30)。本研究もそれに従い、動詞を分類する際、有情物であるか無情物であるかを考慮に入れる。

<sup>9</sup> Jacobsen(1992)では、有対自他動詞を語末の形により 16 種類に分類している。本研究では、語末の形だけではなく、可能の意味を含むか否かも扱っている。同じ有対自動詞でも、主語が有情物であるかあるいは無情物であるかによって可能の接辞「レル・ラレル」と「コトガデキル」と共起できるかが決まる。例 a:成人に達したので映画館にはいる(○はいれる)。と、b:かばんが大きいので本がもつとはいる(×はいれる)。それらを含めて考え、有対自動詞を 5 つのパターンにした。

<sup>10</sup> この分類は Jacobsen(1992)の分類 2 に従うものである。

<sup>11</sup> この分類は Jacobsen(1992)の分類 3 に従うものである。

<sup>12</sup> この分類は青木のタイプ 4 に従うものである。

<sup>13</sup> この自他同形の分類は長友(1997)の分類に従うものである。



2. 無対他動詞:

例: 読む 食べる

3. 無対自動詞:

A 類 主語が無情物<sup>14</sup> 例: 晴れる (夜が)明ける

B 類 主語が有情物 例: 寝る 出かける

以上の分類に基づき、習得が難しいと思われる可能の意味を含む有対自動詞について、実際の習得状況を調査する。その際、分類表の中で、どういった範疇が相対的に習得しにくく、どういった範疇が習得しやすいかを明らかにする。

#### 4. 仮説

先行研究とこれまでの考察から、本研究での仮説は以下の通りとする。

- 1、u-eru の対応である A 類自動詞の習得が全体を通して最も難しい。可能の意味を含みうるこれらの自動詞は「レル」「ラレル」と共起させると対応する他動詞と同形になるから、学習者にとって間違いやすいと考えられる。
- 2、B 類自動詞は、「レル」「ラレル」と共起できる、つまり可能形が作れるが、可能形がいつも<使える>わけではない(長友1997:7)。従って、主語が無情物である場合の方が主語が有情物である場合より習得が難しい。
- 3、C 類自動詞は全体として習得しやすい。「見える」のように主体の知覚能力を表わすものと、「折れる」のような他動詞「折る」に接辞-eru を付加することによって作られる可能動詞と呼ばれるものと同形であるものと考えられるからである。
- 4、D 類 E 類動詞の習得は難しい。自動詞の基本形そのものが文の中で形式上無標識の可能表現になりうるからである。
- 5、無対自動詞3の A 類は自然現象などを表わし、主語が無情物である。そして、中国語では有標識の可能表現になりうるから、学習者にとって習得が難しいと考えられる。

<sup>14</sup> 先行研究を踏まえたうえで、可能形を作る際、語末の形の類似が誤用を招くと思われる。従って、本研究でのこの分類は、自動詞と他動詞の間、A 類 B 類と違って語末が形態的類似点が目立たない項目を一括して一つの類にしたものである。

<sup>15</sup> 主に天候・気象などを表わす無対自動詞(早津(1987:85))を取り上げた。

封 小芹

これらをまとめると表3のようになる。

表4 本研究の仮説一覧

難易	原因	類		備考
習得が 難しい	形態	有対自動詞	A 類(u-eru) (あく)	自動詞を「れる・られる」共起させると 対応する他動詞と同形になるから
			D 類(自他同形) (ひらく自動詞)	形式上、無標識の可能表現になりうる
			E 類(おちる)	形式上、無標識の可能表現になりうる
	主語	無対自動詞	B 類(aru-eru) (あがる)	主語が無情物である場合は、可能の意味を含 みうる
習得が 易しい	形態	C 類(見える、切れる)	無対自動詞 (夜が)明ける	主語が無情物である
				知覚の能力を表すものである
	主語	B 類(あがる)	他動詞に接辞-eru を付加して作られる 可能動詞と自動詞が同形になる	主語が有情物である場合

## 5. 調査方法

### 5.1 調査対象者と実施時期

今回の調査は2005年3月上旬に、中国江蘇省南京市と南通市で行った。参加者は全員中国語を母語とし、日本語を専攻としている学生で、合計37名である。皆大学に入って初めて日本語を勉強し、日本語学習歴は3年間で、学習時間は700時間～800時間である。クローズテストを使った実力診断テストと合わせて、調査時間は計30分と設定した。

### 5.2 測定用例文

本調査で使った例文の動詞については、まず、張(1998)、龐(1999)で提示された例文の中から取り上げた。(張(1998)と龐(1999)の例文は作例のほか、『外国人のための基本語用例辞典』から取り上げられたものであった)。それ以外は、筆者の作例を用いた。作例に関しては、母語話者に内省してもらってから実際の調査用例文として使用した。

自動詞を使うか他動詞を使うかについては、文の前後の文脈によっても違ってくると言われているが、今回はあえて前後の文脈、つまり場面設定を考慮に入れずに、日本

語の文の意味が提示されている中国語の文と同じ意味になるように、提示しておいた一つの動詞の可能形の候補の中から適切なものは全て選択するように指示した。日本語に対しての中国語の訳文については、中国にいる大学の日本語の教師三人に確認してもらった。

### 5.3 テスト内容

テストは学習者の可能の意味を含む有対自動詞への産出能力を測るために、動詞の分類に基づき、有対自動詞だけではなく、比較のために、有対他動詞、無対他動詞、および無対自動詞も調査対象として使い、40問の穴埋め問題を用意した。問題はまず、可能の意味を含む中国語の文を提示して、それと意味が同じ日本語の文を提示しある動詞で完成させるという形で行った。学習者の産出的な能力を中心に測るために、正答となりうるもののうち、一つでも答えられる場合正解とする「不完全解答形式」の採点方式と、理解力を測定するために、複数個答えが存在する場合全ての答えが書けてはじめて正解とした「完全解答形式」という二つの採点の仕方を採用した。

実際のテストで用いられた例文は以下のようである。

看汉语意思, 然后再完成下列各句子。如果有多种说法的请都填写上。

1 门怎么也打不开。

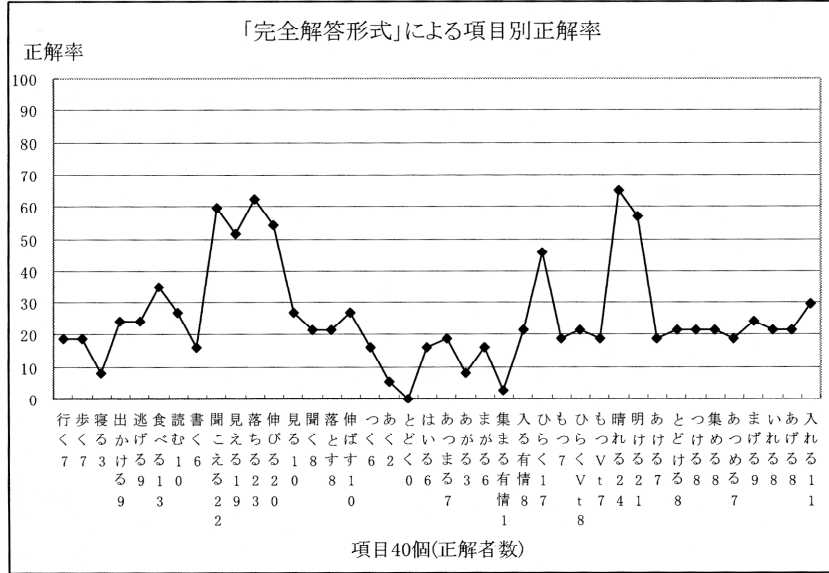
ドアをあけようとしても、なかなか\_\_\_\_\_。

## 6. 調査結果

調査結果は以下の図1と図2になっている。横軸は調査した40項目であり、縦軸は項目ごとの正解率になっている。図1は不完全正解であって、正解が複数個存在する場合、その中で1つでも書けたら正解と見なすものである。それに対し、図2は、正解が複数個存在する場合、存在する答えを全部書けてはじめて、正解と見なす採点の仕方による結果である。不完全正解の場合について、他動詞、あるいは主語が有情物である場合は、正解数が複数個存在しうるので、当然一つでも書けたら正解にするというのは、この類の項目にとって、有利な条件になるわけである。逆に正解数が一つしか存在しない項目の方は不利な状況にあって、正解率が低くて当然である。一方、完全正解の場合は、つまり、答えが複数個存在しうる項目に関して、その複数個の正解が全部書けないと正解できなかったものとしないので、不利な条件になるわけである。これに対して、もと



図2



仮説2に関しては、この分類は自動詞と他動詞の間で語末の形「aru」「eru」という対応をなしているのが特徴のひとつである。もう一つの特徴は自動詞のほうは、文脈によって、主語が有情物と無情物の両方に使われる。そして、主語が有情物である場合、習得が易しく、主語が無情物である場合、習得が難しい。図1からもわかるように、「あつまる無情19%」「あつまる有情97%」、「はいる無情16%」「はいる有情86%」のように、文の中で主語が有情物であるか無情物であるかによって、正解率ははっきりした差が出ていることが窺える。つまり、習得の難易さがはっきり出ており、主語が無情物の場合正解率が極めて低い結果となり、仮説2も支持されたと見える。

仮説3については、分類表の1のC類(「見える51%」「聞こえる59%」)が高い正解率を示している。この結果からC類動詞の習得が易しいという仮説3も支持されたと見える。

仮説4に関しては、まず、自他動詞同形のD類は他動詞のほうが高い正解率(「ひらく76%」「もつ84%」)を示している一方、自動詞のほうがそれぞれ比較的低い正解率(「ひらく46%」「もつ19%」)を示している。なお、自動詞としての「もつ19%」は低い正解率を示しているが、自動詞としての「ひらく46%」は他動詞の「ひらく76%」より正解率が低くなっているが、50%近いという、それほど低い正解率でもない結果となっている。したがっ

封 小芹

て、この結果だけからはD類は習得が難しいという仮説は支持されないとされる。

さらに、仮説4におけるE類動詞(「落ちる」「伸びる」)について、先行研究を踏まえ、可能の意味を含む有対自動詞であると見なし、恐らく習得は難しいと仮説を立てたが、実際の調査結果を見てみると、「落ちる62%」、「伸びる54%」、と50%を超えた正解率が示されている。従って、総じて仮説4に関しては、「もつ」以外は仮説を支持しないという結果に終わった。

仮説5について、無対自動詞3のA類動詞「晴れる65%」「明ける57%」は50%を超えた低いとは言えない正解率を示し、このグループは習得が難しいという仮説を支持していない。

ここまでを要約すると、仮説1～3は支持され、仮説4は一部のみ支持され、仮説5は全面的に支持されなかったという結果になった。

図1と図2を見ると、明らかに、「不完全解答形式」と「完全解答形式」では、すべての他動詞の正解率がかなりの差が出ている。

ここまででは調査結果と仮説の検討であるが、次は学習者の各項目動詞に対する反応パターンを考察することにする。

## 7. 考察

1のB類動詞について、調査項目である「集まる」と「はいる」を取り上げてみると、同じとはいえ、主語が有情物の場合、正解率がそれぞれ97%と86%であるのに対し、主語が無情物の場合、正解率が19%と16%になっている。さらに、「あがる」と「まがる」も例に取って見ると、両方とも主語が無情物の場合であって、正解率がそれぞれ8%と16%である。この種の動詞を指導する際、主語の変化によって可能形も変わるということを、可能表現を教える意味で、学習者に十分分からせる必要があると思われる。

1のC類動詞は、この種類の動詞分類は青木(1997)に従うものである。「見える」「聞こえる」のように、主体の知覚能力を表すものと「切れる」「売れる」など有対他動詞「切る」「売る」に接辞「eru」を付加することによって作られる可能動詞と呼ばれるものと同形であるものがある。

例 7 この包丁なら、よく切れる。 都築2001により

1のC類の自動詞は形態上からも、意味においても「可能の意味」を含むという特徴を

表わしていると考えられる。従って、この種の動詞は可能の接辞「コトガデキル」「レル」「ラレル」と共起できないことがわかる(青木1997)。学習者の正解率を見てみると、「見える51%」「聞こえる59%」となっている。もっと高い正解率を示すと予測していたが、学習者は可能の接辞「コトガデキル」「レル」「ラレル」を適用できない動詞にまでその方法を使用するという、「過剰般化」(「\*聞こえラレル」「\*聞こえるコトガデキル」)の傾向が示された。

自他同形の1のD類動詞「ひらく」「もつ」などについて、他動詞としての「ひらく」「もつ」は他動詞であることから、いずれも可能の接辞「コトガデキル」「レル」「ラレル」と共起できる。しかし、自動詞となると、主語が無情物であって、文脈によっては可能の意味を含むと考えられる。そして、その場合は無標識の可能表現になる。

例 8 暑いからこの魚は明日までもたない 『小学館日中辞典』

このような文は、「\*もてない」とは言わない。この点に関して、学習者は自他同形であることが認識できているか否かを把握しなければならぬ。今回の調査で見た結果から自動詞「もつ」は仮説通り習得が難しいと言えよう。一方、「ひらく」は46%の正解率を示している。確かに他動詞と比較したら低い正解率だが、これだけでは習得が難しいとは判断しにくい。比較的良好に使用されている日本語の教科書を参考にしてみると、初めて「ひらく」が出現したのは第1冊の18課で、自他両用として紹介されているが、実際の本文の中で二回も「パーティをひらく」という決まったフレーズのような形で他動詞として出現している。つまり自動詞としての使い方は教科書では紹介されていない。

1のE類動詞について、E類動詞は、有対自動詞の場合は、無標識の可能表現になりうる。そして主語が無情物である。たとえば、

例 9 髪がなかなか伸びない。

この群については、仮説として、習得が難しいとしていた。結果としては今回の調査項目として取り上げた「落ちる」「伸びる」の正解率は62%と52%となっている。調査項目の中で一番高い正解率97%に比べては相対的に低い率を示している。やはり習得が他動詞と比べて難しいと言える。一方、1のA類やB類と比較して、高い正解率を示しているとも言えよう。これらの有対自動詞は可能の意味を含みうると考えられるが、可能形式「レル」「ラレル」を付加することによって作られた可能形は、有対他動詞との間、語末はそれほど混乱を起こす形態ではないと考えられることから、教科書や普段のインプットという観点からしても、可能形として使われることがあまり見られない。従って、学習者は

封 小芹

あえて可能形「伸びられる」「落ちられる」にせず動詞の基本形のままにしたと考えられる。

3の A 類について、まず、この種類の動詞は今まで見てきた動詞と違って、無対自動詞である。且つ、天候・気象・時間の経過などを表わす自動詞である(早津1987)。広い意味での自然現象を表わすことから、主語が無情物であると考えられる。しかし、習得が難しいと仮説を立てたにもかかわらず、取り上げた項目「晴れる」「明ける」の正解率は65%と57%になっており、決して低い正解率とは言えない。実際、調査の例文で、五つの選択肢のうち、三つが可能の標識になっているという、ある意味誘発的とも考えられ得る状況において、なぜ70%以上の学習者が可能の形式ではなく、動詞の基本形を選択したのであろうか。原因として考えられるのは、学校で使用されている教科書にしろ、普通の作文にしろ、「晴れられる」あるいは「(夜が)明けられる」というような表現は普段耳にすることはないと考えられる。つまり、このような自動詞は主語が無情物であるが、基本形そのものが可能形として使われうる。そして、可能形の接辞と共起させる形は学習者にとって馴染のない形であって、あえて「レル」「ラレル」と共起させて可能形にしないと考えられる。

以上考察を行ってきたが、次に教育という点において少し考えていくことにする。学習者にとって必要なのは、正しい形式の作り方もさることながら、その形式を具体的にどういう場面で使うかという知識であろう。ここが欠落していると、文法知識があっても使えないということになる。たとえば、「可能表現」という構文を習得するために必要な知識は、可能文の作り方に加えて、どのように使うかという知識である。

学習者の文法知識は、良くも悪くも、どのように教えられたかということに左右される部分が多い。教材(教科書や問題集、文法解説書)の誤った(ないしは、誤解を生む)教え方、あるいは、不完全な教え方が誤用や非用を生む要因になる(あるいは現になっている)のではないかという観点から教材を検討する。上海外語教育出版社による『新編日語』の第1冊と第2冊を取り上げることにする。この教科書のシリーズでは最初に可能について触れたのは第1冊の第十一課である。

「…ことができる」是一种表示可能的讲法,「动词连体形+ことができる」表示外部条件允许或本身有能力做该动词表明的动作。

そして、第2冊第8課では、可能態に触れた際、このように述べられている。

除「(する)ことができる」可以表示「能够」之外,动词可能态也能表示具有某种能



力或外部条件「有可能」。

以上教科書の説明を読む限り、文脈によって自動詞が可能の意味を含む場合があり、そのときは、可能の接辞と共起できないというような説明が足りない。従って、この種の表現の習得が難しいことは容易に想像できる。

## 8. 終わりに

本研究では先行研究とは異なる手法、つまり、まず、主語が有情物であるか無情物であるか、語末の形が混乱を起こしやすいか否かなどの要素を考え、動詞の分類を行った。ついで、先行研究を参考にしながら自動詞の習得の難易について仮説を立てた。それから項目動詞を他の類の動詞と比較し、学習者に調査用例文を完成させる形を用いて、「可能の意味を含む自動詞」の習得状況を調べた。その結果、「可能の意味を含む自動詞」は無標識の可能表現とはいえ、一概に全ての項目の習得が難しいというわけではないことがわかった。分類表の1のA類(自動詞と他動詞は-u と-eru の対応をなす)に関して、動詞の語末の形が混乱を起こすという形態的特徴がポイントになっていると言えよう。1のB類(「あがる」「あつまる」など)に関しては、主語が有情物であるか無情物であるかがポイントである。1のD類、E類、そして2のA類に関しては、主語が無情物であっても、それほど影響を受けることなく、無標識の可能表現であると思われるが、動詞の形態上の特徴、つまり、自動詞を可能形式「レル」「ラレル」と共起させても、形態上混乱を起こしにくいと考えられるから、学習者にとって習得は意外に難しくないようである。

以上の分析と考察からわかったように、中国語を母語とする日本語学習者が可能表現を学ぶ際には、日本語の可能表現の特徴を把握する必要がある。しかし、初級の段階では、教科書及び教師は、学習者に可能形の形を定着させることに重点を置いて、「『コトガデキル』(『新編日語1』 p201)は可能形を表すことができる」、または、「動詞の可能態(「レル」「ラレル」と共起させることによる)も可能の意味を表すことができる(『新編日語2』 p181)」、といった解説のみを与え、文型練習をさせることになりがちである。初級の練習段階ではまだ少ないが、中級に上がると学習者は自由作文のチャンスが増え、可能の意味を含む有対自動詞に関わる誤用も自然に増えると考えられる。従って、機械的に動詞の可能形を覚えさせるだけではなく、文の持つ意味によって、可能形にできな

封 小芹

い動詞もあるということに初級の段階で気づかせることが重要である。そこで、可能表現を学ぶ際、『新編日語』のように、教科書に書いてある内容以外に、

- 1 自動詞か他動詞か
- 2 主語が有情物か無情物か(意志動詞か無意志動詞)

このようなポイントを押えておく必要があると考えられる。その際、動詞の分類表を学習者に教えるのも一法と考えられる。

### 参考文献

- 青木ひろみ(1997)「《可能》における自動詞の形態的分類と特徴」『神田外語大学大学院紀要言語学研究』第3号 pp11-26
- 金子尚一(1980)「可能表現の形式と意味(1)―“ちからの可能”と“認識の可能”について―」『(共立女子短期大学(文科))紀要』23 pp62-71
- (1986)「日本語の可能表現<現代語>標準語のばあい」『国文学解釈と鑑賞』51-1 pp88-89
- 鎌田 修(1999)「KY コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』(平成8年～平成10年度科学研究費補助金研究結果報告書基盤研究(A)(1)課題番号08308019研究代表者カッケンブッシュ寛子) pp227-237
- 小林典子(1996)「相対自動詞による結果・状態の表現―日本語学習者の習得状況―」『文藝言語研究言語篇』29巻 筑波大学文藝言語学系 pp41-56
- 白川博之(2002)「記述的研究と日本語教育―『語学的研究』の必要性和可能性―」『日本語文法』2巻2号(2002) pp62-80
- 張 威(1998)『結果可能表現の研究―日本語・中国語対照研究の立場から―』くろしお出版
- 都築順子(2001)「日本語の『可能の意味を含む自動詞』に関する考察―中国語との比較対照において」日本文化論叢第二回中日文化教育研究フォーラム報告書 大連理工大学出版社 2001
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタックスと意味』くろしお出版 pp308-315
- 中石ゆうこ(2004)「日本語の記述的研究から独立した習得研究の必要性―日本語学

可能の意味を含む有対自動詞の産出的能力の習得

- 習者による対のある自他動詞の活用形使用を例として—」『日本語文法』4巻2号 日本語文法学会 pp120-135
- 中石ゆうこ(2005) 「対のある自動詞・他動詞の第二言語習得研究—『つく—つける』、『きまる—きめる』、『かわる—かえる』の使用状況をもとに—」『日本語教育』124号 pp23-32
- 早津恵美子(1987) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」京都大学言語学研究会『言語学研究』7 pp79-109
- 藤井 正(1971) 「可能」『日本文法大辞典』 明治書院 p125
- 龐黔林(1999) 「日中両国語の可能表現について—自動詞の可能表現を中心に—」神戸女学院大学論集45(3) pp47-59
- 森田良行(1988) 『日本語の類義表現』 創拓社 pp85-90
- ウェスリー・ヤコブセン(1989) 「他動性とポロとタイプ論」『日本語学の新展開』 くろしお出版 pp240-24
- 周平 陈小芬 編(1994.1) 『新編日语1』 『新編日语2』 上海外语教育出版社(1999重印)

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教員である木下徹先生にたくさんのご指導と有益なコメントをいただきました。心より感謝申し上げます。調査を行う際、南京師範大学の恩師である呉立新先生にも大変お世話になりました。友人の山本豊久さんにもいつも熱心に相談に乗っていただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

